

パリ便り

パリで観たダンス・ドキュメンタール

—— 《Cédric Andrieux》, 《Une semaine d'art en Avignon》

北原 まり子

一年前よりパリ第八大学の舞踊学科に籍をおいているが、舞踊史学はその国で行われている舞踊実践と強く結びついていることが多いので、海外で学ぶことは面白い体験である。特にこの学科は二十数年前に新設されたばかりで、〈ダンス・コンタンポレンヌ〉を主な対象としており（私自身は20世紀初頭を研究対象としているのではあるが）、現在のフランスの舞踊実践に積極的に関与する姿勢が強い。ここの舞踊史系の研究者たちの現在の関心は、1980年代以降に顕著となる所謂〈ヌーヴェル・ダンス〉以前のフランスの舞踊状況を再検討すること（つまり戦後のアメリカの新しい舞踊潮流からの影響）、またイザベル・ロネ教授は舞踊作品の復元・引用をめぐる授業を今年度開講するらしい。アメリカでは1980年代後半に、ニジンスキーの二作品《牧神の午後》《春の祭典》が舞踊史学の研究者によって舞踊譜や記録資料を基に復元上演され大きな影響を与えたが、パリ第八大学舞踊学科の場合、1992年の振付家ドミニク・バグエの死直後に組織されたレパートリー伝承団体〈Carnets Bagouet〉、また1993年より歴史的舞踊作品の新解釈に基づく上演を行っている団体〈Quatuor Albrecht Kunst〉と関係を持ちながら、復元・引用をめぐる批判的・創造的な理論の構築を試みていると言える。

ところで、上記の環境に身を置いていると、「ダンス・ドキュメンタール」とも言える、過去の舞踊作品を一種のドキュメンタリーとして引用する作品に出会ったとき、いろいろと考えさせられるものである。ここでは国際大学都市劇場で最近上演された二作品に触れようと思う。

一つ目は、振付家ジェローム・ベルによる作品《Cédric Andrieux》(2011年12月8日～23日、2009年初演)。裸舞台の上で、30代半ばのタイトルと同名の舞踊家（現在リヨン国立歌劇場バレエ団所属）が自身の舞踊家としての遍歴を、1999～2007年のマース・カニングハム・ダンス・カンパニー（N.Y.）での経験に重点をあてて、当時の舞台や稽古を部分的に再現しながら語る（説明する）。これは、ベルが2004年より始めた、ダンサーが舞台上で自身の舞踊経験を語るというシリーズの一作品である。語り（説明）と舞踊による引用（再現）は「できるだけシンプルに」舞台化され、スペク

タクルというよりはレクチャーの形式に近いとも言える。ベルは、本作品の成功の要因を、「説明」に比重をおいたことと述べている。「舞踊はコミュニケーション形式として言語よりはるかに不明瞭である」、「観客は普通、舞踊において多くのことを〈理解〉しない」、しかし「セドリックは彼が踊るものを説明する」と。本作品は、30分短縮した子供向け公演として、一週間程前にパリ市立アベス劇場で上演され（《Cédric Andrieux - 50'》）、その際上演後、舞台のアンドリュウと観客の間に質疑応答が設けられた。

二つ目は、元オペラ座ダンサーで振付家のオリヴィア・グランヴィル作《Une semaine d'art en Avignon》(2012年3月15日～20日、2010年初演)で、17日の回には1968年のアヴィニョン演劇祭で学生集団によって撮影された記録映像『Être libre』の上映と当時の関係者達による対談も行われた。作品は、1947年にヴィラルール演出《リチャード二世》に出演したレオヌ・ノギャレード（オリヴィアの実母）による語りと、オリヴィア及び舞踊家カトリーヌ・ルグランによるバグエ、ベジャール、バウシュの舞踊作品の部分的引用を中心に構成されている。この二人はバグエの元ダンサーとして前述した〈Carnets Bagouet〉に参加、1993年にアヴィニョン教皇庁での上演に出演した。つまり、彼女たちのバグエ作品の引用は、前述したアンドリュウと同様、自身の舞踊経験に基づいたものと言える。

この二作品は、演者の記憶を言葉による説明と身体による引用を通して舞台上で表現している。それはダンサーの自叙行為である以上に、彼らの身体的表現（引用）が「舞踊史」におけるある瞬間や文脈（カニングハム、バグエといった）に強く制限されていることを明らかにしている。一方で観客は、総合芸術から切り離された部分的な動作の引用を一つの完成したスペクタクルとして鑑賞することはできない。言葉による「説明」もそれを遮る役目を果たす。この二つの側面を持ちあわせた二作品は、20世紀後半に多様化・国際化した舞踊界と、その世界を漂流するダンサーという存在、彼らの記憶、身体、また役割について示唆に富んだものであった。